

クシロムカシバク

このバクは、草食の大型哺乳類で、豚に似ていますが、細長い鼻でものをつかむことができます。バクの現存種としては 4 種が知られており、南米、中米および東南アジアに生息していますが、すべて絶滅危惧種です。数百万年前には、現在は絶滅してしまった数種のバクが、北米やユーラシア大陸を歩き回っていました。

この化石は、新しく発見された種であるクシロムカシバク（学名：*Colodon kushiroensis*）の上あごです。この化石が見つかった地層に基づいて、クシロムカシバクは約 3,800 万年前に生息していた、と古生物学者たちは考えています。

氷期における移動

クシロムカシバクの臼歯の化石は、北米のバクの化石で見られるものと似ています。これにより、古生物学者たちは、クシロムカシバクは北米からユーラシア大陸を経由して北海道にやって来た可能性が高い、と結論付けています。最終氷期の間、海面は現在よりかなり低く、北海道は、樺太島を介してユーラシア大陸と地続きでした。

稀少な発見

この化石が珍しい理由は 2 つあります。1 つは、これがクシロムカシバクの化石として唯一知られているものだからです。もう 1 つは、この大きさの化石が無傷で見つかるのは稀だからです。この化石は、長さ 10cm、幅 9cm で、小臼歯と臼歯を含む 9 本の歯が残っています。この化石は、釧路の東、十町瀬にある崖の近くで、1968 年に中学生が発見したものです。